

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00955

研究課題名（和文）戦乱から平和・安定への転換に関する比較地域史研究 九州を中心に

研究課題名（英文）Comparative regional historical research on the transition from warfare to peace and stability - with a focus on Kyushu.

研究代表者

木村 直樹 (Kimura, Naoki)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：40323662

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、17世紀、九州の諸大名家が、いかようにして戦国時代の不断の戦争の時代を乗り切るために編成した領内や社会の仕組みを、新たな平和な時代の到来に合わせて適的にさせていったのか、という視点から、九州の諸藩の史料を分析していった。

特に、九州の場合は、中世以来の土着化していた旧族居付型の大名と、日本列島中央部から兵農分離や石高制といったあらたな社会システムを在地社会に直接移築した織豊型大名とが入り混じっていることから、これらを比較する視点は有効であると考え、調査分析を行った。その結果は、農村のみならず都市のありよう、さらには全国に出された法令の受容などの特性を明かにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、近世社会の特性を示す、三本柱（兵農分離・石高制・鎖国）について、それぞれその特性を、九州の17世紀の史料から分析することができた。これらの特性は特に中世の在地社会の特性を色濃く残した九州では必ずしも貫徹していないが、同時に社会全体の趨勢と適合させる柔軟な仕組みづくりがあることを証明できた。

このような地域的な違いは、現代社会にいたる各地域の特性にも結びつく要素もあることから、現代社会を見るうえでも有効な視角を提供できたと考えることができる。

研究成果の概要（英文）： In this study, we analysed the documents of the feudal lords of Kyushu in the 17th century from the perspective of how they adapted the territorial and social systems that had been organised to survive the period of constant warfare during the Warring States period to the new era of peace.

In the case of Kyushu, in particular, there is a mixture of the old clan-appointed feudal lords who had been indigenous to the region since the Middle Ages and the Shokuho-type feudal lords who had directly transferred new social systems, such as the separation of agriculture and warfare and the Kokudaka system (tax system), from the central Japanese archipelago to local society, so we considered it useful to compare them and conducted research and analysis. The results revealed the characteristics of not only the rural areas, but also the urban areas and the acceptance of laws and regulations issued throughout the country.

研究分野：日本近世史

キーワード：兵農分離 石高制 身分制 キリシタン禁制 家臣団統制 島原の乱 近世都市

1. 研究開始当初の背景

16世紀は東アジア全体で激動の時代だった。旧来の国家による秩序が大きく動揺し、国際的な銀の流通によって、商業や軍事に基盤をおく新しい勢力・権力が台頭してきた。それが満洲族の清朝や日本の豊臣政権だと考えられている。それに続く17世紀の東アジアでは、戦乱から平和・安定の時代へと転換し、各地域で新しい秩序形成がみられた。日本でも激しい戦乱の後に「徳川の平和」とも言われる安定の時代に移っていった。この転換の過程や具体相、意味や影響、そしてそこに孕まれた矛盾を考へてみることは、第二次大戦後から現在に至る私たちの時代を生きる上でも示唆深いと考えられる。

研究史上では長らく、兵農分離・石高制・鎖国の3点が、日本近世の国家と社会を日本中・世とも外国とも分かち特徴・指標ととらえられてきた。これらの成立の過程の究明こそが日本近世社会成立史の主要な課題とされ、膨大な蓄積がなされてきた。

ところが1980年代にはこのうち鎖国について、それは19世紀に成立した概念であって、17世紀の実際の対外関係を表すものではないことが強調され、海禁・華夷秩序、「四つの口」論が提唱された。兵農分離についてもその概念自体を問い直し、さまざまな要素・側面に腑分け・分解した上で、要素の一つひとつを再検討することによって、兵農分離政策はなかったとする見解も現れている。石高制についても、石高の本来の性格を年貢高とみる説が戦国史研究者によって強調されるようになったことは周知であろう。

中世からの連続性が強調されているというだけでなく、戦後の近世史像・近世史研究を特徴づけてきた大きな概念装置・分析枠組みがいずれも批判の対象とされて読み替えられるか、詳細な実証研究に道を譲っているというべき状況にある。たしかに九州をはじめとする列島縁辺部の領国や社会をみると、もともと国際的な社会・経済に深く組み込まれていて、また兵と農は容易に分離されず、石高制や村請制も当初は表面的にしか導入されていなかった。これを例外として済ますわけにはいかないだろう。

ただ、一方で大きな概念を解体してしまえば済むという問題でもなく、日本近世は、豊臣政権やそれが公約としつづけた大陸侵攻戦争（「唐入り」）によって特殊な形で形成された枠組みが、独特の経緯を経て伝統化して、国際情勢の安定のなかで長期にわたって存続した点に一面の特質がある。奉公人、すなわち兵と労働者の特殊な存在形態や法制、貨幣としての金銀の流通などもその例である。

以上をふまえ、戦乱の時代から安定の時代への転換を、九州の諸領主と地域社会に即して検証することは、近世社会成立史の一局面を再検討することになり、日本近世史全体にとっても意義をもつだろうとして、本研究を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究では、まず、九州を中心とする列島縁辺部における兵農未分離的な領国社会の特質とその展開過程はどうであったか、上方などとの比較も念頭におき、あらためて検討した。また戦乱や国際的な商業・流通の展開のなかで流動的だった人びとが、どのように定着して(させられて)ゆくのか。定着した諸身分がいかに継承(相続・世襲)されてゆくか。それらを大名史料と在地(町方を含む)史料両方の形成のされ方・関係性に特に注目して検討した。

本研究では、とくに九州の領主と地域社会に注目している。九州は列島の他地域とは異なり、中世において中国・朝鮮・琉球や、新しくそこに参入してきたポルトガル人らと直接に関わり、諸外国と伝統的な政治・経済の中心地であった上方との間を媒介する役割を果たしてきた。上方との商人の往来も激しく、その面では人びとの流動性も高かった。九州に成立した諸戦国大名も、そうした貿易・外交に深く関わってきた。

豊臣政権は、そうした九州を1587年に平定し、西部・南部および対馬・壱岐では旧族居付大名の多くを安堵して服属させた。また博多や長崎を直轄して新しい都市をつくり、北部・肥後には豊臣系の大名を領主として送り込み、検地を行わせて直轄地も設定し、大陸侵攻の前線基地とした。大名は以上二つの類型に分けられるが、総じて上方とは相当に異なる多元的な地域のあり方が併存・存続した。

大名が軍団や領国を組織・編制する方法も領主の個性や地域性によって多様であった。そこに豊臣政権による軍役が賦課され、兵農未分離的な面が継続・存続したという面と、新しい軍団や領国体制として再編成されたという面とがあるだろう。対馬宗家・佐賀鍋島家・薩摩島津家・大村大村家・平戸松浦家など旧族居付型の諸大名と、福岡黒田家や肥後細川家のような織豊系の諸大名とでは大きな違いがあるが、それぞれ独自の領国支配を行いながら、相互に接触・交流して影響を及ぼしあっていた。

また「平和と安定」に至る過程で、政治的には、熊本加藤氏の改易と細川氏の熊本入部、島原天草一揆などが大きな画期となるが、その後は、大名が長く定着し、安定する。社会的には都市・商人や船方・水主・走り者など流動的な人びとの動きやその把握・定着のあり方はどうであったか、それと検地や村請制などとの関連はどうであったかが大きな問題である。

ここにはキリシタン禁制や政権による貿易統制も深く関わっている。

かつては検地や家臣団編成、(初期)豪商や走り者、人身売買や奴隷貿易、九州各地に分布する唐人町の問題、朝鮮出兵の被虜人の問題、上方で奉公人を抱えて九州へ下す「上方抱え下し者」等について一定の研究がなされたが、いずれも近年ではあまり顧みられていない。

貿易で利潤をあげていた九州諸大名が、いわゆる鎖国後に大坂を中心とする国内市場に包摂されていく過程の究明も不十分である。

これらはいずれも、九州に即して「流動性から定着・安定へ」という観点に立つことで、多くの論点を蘇生させつつ、日本近世史の枠組みを創造的に問い直す可能性をもつ。本研究課題名に掲げた「比較地域史」は、上方との関係や比較などを含め、以上のような日本国内における九州の歴史的・地政学的な位置自体を方法として生かし、かつ、九州内部で領国・地域間の比較を行うことが有意義であるという両面を含意したものである。

3. 研究の方法

九州には、細川家やその家老松井家、宗家、鍋島家、島津家やその家臣の史料など、他地域に比して大名家・領主(家臣)家史料が膨大に伝存しているという大きな特徴がある。ただし、全貌が一応わかっている史料群についてもその史料論的検討は緒についたばかりである。膨大さゆえ悉皆的な分析を行うには長い年月を必要とするが、その足がかりを築くためには、史料群を相互にパイロット的に比較研究してみる作業が有効である。本研究では細川家・宗家・鍋島家・松浦家を中心に、他の例を見渡し、先祖書の作成などを含む家臣団(兵)統制、人別帳や通行手形(女手形)などにみる人の移動の統制、人返しなど大名相互の接触・交渉、藩財政と流通統制策等に限定して、史料の作成のされ方という基底から比較検討を行った。

一方で、九州では近世初期の在地史料(町方史料も含む)はそれほど伝存が知られておらず、不明確である。これは領主史料の膨大さと表裏であって、兵農未分離的な権力と社会のあり方自体が関わっている可能性がある。上方などでは太閤検地帳が村に交付され、それによって村請制が確立し、まず年貢関係、やがて宗門人別関係や触留等の史料が次第に作成、伝存するようになる。九州などでは太閤検地が行われたとしても検地帳が年貢収取に用いられなかったケースも多くあったようで、領主の在地性も強く、地方文書の形成のされ方自体が上方などと異なっていたと想定される。領主側の文書と在地の文書を相互に関連するものとして捉え、両者の伝存状態を広く調査し、その関係を検証した。これによって、藩の統治の継続性や安定化と地域社会の支配請負機能の充実とを相関的に検証する。研究代表者が、主として九州における史料調査、領主史料に関する情報の整理を、また分担者が、主として東京における史料収集、在地史料に関する情報の整理を行い、2人が合同で九州と東京とで史料調査や研究会を開催して成果をまとめ、それらは、講演・論文・論文集の形で成果を公表した。

4. 研究成果

本研究で追求した主な論点は下記の著作などに反映をしているので参照されたい。

(1) 兵農分離

九州における兵農分離の特質を検討した。特に、豊臣政権以来社会を覆っていった兵農分離の原則が、実際には、社会の側からどのようにとらえなおされていったのかを検証した。特に、人の移動性が高まった近世の初期の社会状況に対して、幕藩制国家の掌握のありようを明かにした。

【参照論文】雑誌論文 ・ /学会発表 ・ /図書 ・

(2) 近世都市の形成

近世の都市形成が九州においてどのようになされたのか、また近隣地域との関係を視野に検討した。戦国末期、急速に都市として形成された長崎の場合、周辺の貿易都市などから武士階級も含めた人々が流入し、兵農未分離ともいべき状態で都市がなされており、これが17世紀半ばになるまで続いたことを明らかにした。17世紀半ば以後、いわゆる初期豪商やそれに準じる商人たちの退場によって、都市運営は、武士階層と地役人からなる町人階層とに分離し、近世的な都市へと変貌を遂げていくことを人的・空間的側面から明らかにした。また、国元と同様に町人や農民らとの関係が不可欠な江戸藩邸についても検討を行い、江戸の社会に拘束されながら、他家や町人らと共存する方法を明かにした。

【参照論文】雑誌論文 ・ ・ ・ /学会発表 ・ ・ ・ /図書 ・ ・ ・ ・

(3) 家臣団統制

武士階級が在地性をもった下級武士も含め、どのような近世社会に適合的な家臣団編成を行ったかを示した。特に武家奉公人や牢人に注目し、彼らの基本的な生活空間が都市にあることの意味を問うた。

【参照論文】学会発表 /図書 ・

(4) キリシタン禁制政策と対外政策

17世紀におけるキリシタン禁制政策の展開と連動する対外政策について検討し、それが身分制の展開との連動性もあることを示した。また一度形成されたキリシタン禁制の在り方が次の

時代に内実を変容させ社会に定着していく過程を示した。

【参照論文】雑誌論文 / 学会発表 / 図書 . . .

【参照論文】

〔雑誌論文〕

木村直樹「幕府の「鎖国」政策とその実態」『歴史地理教育』(901)、4-11頁、2019年11月 査読有り・招待有り

木村直樹「長崎をささえる大分との回路 近世の人・物・情報の交流」『大分県立先哲史料館史料館研究紀要』25、1-9頁、2020年10月、招待有り

木村直樹「国際貿易都市長崎の成立と特質」『地図情報』41(1)、13-16頁、2021年5月、査読有り招待有り筆頭著者

木村直樹「長崎からみた天草 - 分断と連帯 - 」『史苑』83(1)、74-93頁、2023年1月、査読有り・招待有り

木村直樹「本山家文書と本石灰町」『長崎市長崎学研究所紀要 長崎学』(7)、4-17頁、2023年3月、査読有り・招待有り

牧原成征「日本の近世化と土地・商業・軍事」『SGRAレポート』86、112 - 125頁、2019年

〔学会発表〕

木村直樹「目撃された朝鮮の人々 - 長崎・長崎街道 - 」シンポジウム「広がる！対馬歴史研究 - 対馬藩から見る江戸時代の日本 - 」、2022年12月10日、招待有り

木村直樹「長崎からみた天草 - 分断と連帯」立教大学公開シンポジウム「天草灘かくれキリシタンの世界：松浦家文書から見た生業、交易、島嶼ネットワーク」2022年3月15日、招待有り

木村直樹「コメント(日本史の立場から)小シンポジウム「礫岩のような国家」に見る「主権」理解の批判的再構築」、第71回西洋史学会2021年5月16日

木村直樹「九州諸藩から見る「長崎・出島」」、長崎考古学会秋季大会、2019年12月14日招待有り

木村直樹「長崎をささえる大分との回路 近世の人・物・情報の交流」大分・長崎交流講座ヨーロッパとアジアの風がふくところ2019年10月6日 大分県立先哲史料館 招待有り

牧原成征「検地がもたらした 分離 と 交流 日本近世の土地所有」第121回史学会大会・公開シンポジウム、2023年11月11日、招待有り

〔図書〕

木村直樹「刻印された長崎の歴史 県庁跡地から考える」片峰茂編『長崎の岬 日本と世界はここで交わった』40 - 54頁、長崎文献社、2019年

木村直樹「伝統都市長崎へー寛文;延宝期の変容」『長崎開港450周年記念展ふたつの開港』、152 - 158頁、長崎歴史文化博物館、2021年

木村直樹「近世貿易都市長崎の特質を考える 尾曲り猫はどこからきたのか」増崎英明編『今と昔の長崎に遊ぶ』33 - 49頁、九州大学出版会、2021年

木村直樹「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」佐藤信編『世界遺産の日本史』289 - 304頁、筑摩書房、2022年

木村直樹「島原の乱と禁教政策の転換」牧原成征・村和明編『日本近世史を見通す1 列島の平和と統合:近世前期』122 - 146頁、吉川弘文館、2023年

牧原成征「織豊政権と近世の始まり」高埜利彦編『近世史講義：女性の力を問いなおす』、9 - 25頁、筑摩書房、2020年

牧原成征『日本近世の秩序形成 村落・都市・身分』東京大学出版会、2022年

牧原成征・村和明編『日本近世史を見通す1 列島の平和と統合:近世前期』、吉川弘文館、2023年

牧原成征・多和田雅保編『日本近世史を見通す5 身分社会の生き方』吉川弘文館、2023年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 木村直樹	4. 巻 7
2. 論文標題 本山家文書と本石灰町	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 長崎市長崎学研究所紀要 長崎学	6. 最初と最後の頁 7 - 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村直樹	4. 巻 83 - 1
2. 論文標題 長崎からみた天草	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 74 - 93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村直樹	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 国際貿易都市長崎の成立と特質	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地図情報	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村直樹	4. 巻 708
2. 論文標題 研究展望 荒野泰典『近世日本と東アジア』（特集 戦後歴史学の著作を読む(6))	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村直樹	4. 巻 9
2. 論文標題 長崎をささえる大分との回路ー近世の人・物・情報の交流ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分県立先哲史料館史料館研究紀要	6. 最初と最後の頁 1~10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村直樹	4. 巻 901
2. 論文標題 幕府の「鎖国」政策とその実態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧原成征	4. 巻 86
2. 論文標題 日本の近世化と土地・商業・軍事	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SGRAレポート	6. 最初と最後の頁 112-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村直樹
2. 発表標題 九州諸藩から見る「長崎・出島」
3. 学会等名 長崎考古学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 牧原成征	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 402
3. 書名 日本近世の秩序形成 村落・都市・身分	

1. 著者名 佐藤信編・木村直樹ほか18名分担執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 世界遺産の日本史	

1. 著者名 代表編著者増崎英明、分担執筆者前田桂子・木村直樹・野上建紀・王維・中島貴奈・吉良史明・Toet Rudy・南森茂太・田口由香・山口敦子・安武敦子・赤澤祐子・才津祐美子・大平晃久・全炳徳・出水享	4. 発行年 2021年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 330
3. 書名 今と昔の長崎に遊ぶ(木村直樹担当 第3章「近世貿易都市長崎の特質を考える 尾曲り猫はどこからきたのか」)	

1. 著者名 編著者長崎歴史文化博物館、分担執筆者木村直樹・安野真幸	4. 発行年 2021年
2. 出版社 長崎歴史文化博物館	5. 総ページ数 192
3. 書名 長崎開港450周年記念展ふたつの開港(木村直樹 担当論考「伝統都市長崎へー寛文;延宝期の変容」)	

1. 著者名 片峰茂編・分担執筆者 木村直樹・寺田正剛・近藤英夫・橋口定志・古巣馨・久留島浩・稲富裕和・野上建紀・高見三明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 長崎文献社	5. 総ページ数 162
3. 書名 長崎の岬 日本と世界はここで交わった	

1. 著者名 片峰茂編・分担執筆者 木村直樹・デ=ルカ=レンゾ・片岡瑠美子・藤田覚・野上建紀・宮崎貴夫・稲富裕和・増崎英明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 長崎文献社	5. 総ページ数 180
3. 書名 長崎の岬 長崎の記憶をほりおこす	

1. 著者名 高埜利彦編・分担執筆者 牧原成征・松井洋子・西田かほる・久保貴子・宮崎ふみ子・小野将・岩崎奈緒子・福田千鶴・吉田ゆり子・柳谷慶子・高部淑子・横山百合子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 261
3. 書名 近世史講義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	牧原 成征 (Makihara Shigeyuki) (20375520)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------